

青年

森 鷗外



新潮文庫

昭和二十三年十二月十五日 発行
昭和四十三年三月三十日 三十二刷改版
昭和五十五年三月五日 五十四刷

著者 森 鷗 外

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替東京四一八〇八番

・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

新潮文庫

青 年

森 鷗 外 著



潮 社 版

青

年

壺

小泉純一は芝日蔭町の宿屋を出て、東京方眼図を片手に人にうるさく問うて、新橋停留場から上野行の電車に乗った。目まぐるしい須田町の乗換も無事に済んだ。さて本郷三丁目で電車を降りて、追分から高等学校に附いて右に曲がって、根津権現の表坂上にある袖浦館という下宿屋の前に到着したのは、十月二十何日かの午前八時であった。

此処は道が丁字路になっている。権現前から登って来る道が、自分の辿って来た道を鉛直に切る処に袖浦館はある。木材にペンキを塗った、マッチの箱のような擬西洋造である。入口の鴨居の上に、木札が沢山並べて嵌めてある。それに下宿人の姓名が書いてある。

純一は立ち留まって名前を読んで見た。自分の捜す大石狷太郎という名は上から二三人目に書いてあるので、すぐに見附かった。赤い襷を十文字に掛けて、上り口の板縁に雑巾を掛けている十五六の女中が、雑巾の手を留めて、「どなたの所へいらっしゃるの」と問うた。

「大石さんにお目に掛りたいのだが」

田舎から出て来た純一は、小説で読み覚えた東京詞を使うのである。丁度不慣れた外国語を使うように、一語一語考えて見て口に出すのである。そしてこの返事の無難に出来たのが、心中で嬉しかった。

雑巾を掴んで突っ立った、ませた、おちゃっぴいな小女の目に映じたのは、色の白い、卵から孵ったばかりの雛のような目をしてゐる青年である。薩摩絛の袴に小倉の袴を穿いて、同じ絛の袴羽織を着ている。被物は柔かい茶褐の帽子で、足には紺足袋に薩摩下駄を引っ掛けてゐる。当前の書生の風俗ではあるが、何から何まで新しい。これで昨夕始めて新橋に着いた田舎者とは誰にも見えない。小女は親しげに純一を見て、こう云った。

「大石さんの所へいらっしつたの。あなた今時分いらっしつたって駄目よ。あの方は十時にならなくっちゃあ起きていらっしやらないのですもの。ですから、いつでも御飯は朝とお午とが一しよになるの。お帰りが二時になったり、三時になったりして、それからお休みになると、一日寐ていらっしつてよ」

「それじゃあ、少し散歩をしてから、又来るよ」

「ええ。それが好うございます」

純一は権現前の坂の方へ向いて歩き出した。二三步すると袂から方眼図の小さく折つたのを出して、見ながら歩くのである。自分の来た道では、官員らしい、洋服の男や、角帽の学生や、白い二本筋の帽を被つた高等学校の生徒や、小学校へ出る子供や、女学生なんぞが、そろそろと本郷の通の方へ出るのに擦れ違つたが、今坂の方へ曲つて見ると、まるで往来がない。右は高等学校の外圍、左は角が出来たばかりの会堂で、その傍の小屋のような家から車夫が声を掛けて車を勧めた処を通り過ぎると、土塀や生垣を繞らした屋敷ばかりで、その間に綺麗な道が、ひろびろと附いている。

広い道を歩くものが自分ひとりになると共に、この頃の朝の空気の、毛髪の根を緊縮させるようなしみを感じた。そして今小女に聞いた大石の日常の生活を思った。国から態々逢いに出て来た大石という男を、純一は頭の中で、臆気でない想像図にえがいているが、今聞いた話はこの図の輪廓を少しも傷けはしない。傷けないばかりではない、一層明確にしたように感ぜられる。大石というものに対する、純一が景仰と畏怖との或る混合の感じが明確になったのである。

坂の上に出た。地図では知れないが、割合に幅の広いこの坂はSの字をぞんざいに書いたように屈曲して附いている。純一は坂の上で足を留めて向うを見た。

灰色の薄曇をしている空の下に、同じ灰色に見えて、しかも透き徹った空気に浸されて、向うの上野の山と自分の立っている向うが岡との間の人家の群が見える。ここで目に映ずるだけの人家でも、故郷の町程の大きさはあるように思われるのである。純一は暫く眺めていて、深い呼吸をした。

坂を降りて左側の鳥居を這入る。花崗石を敷いてある道を根津神社の方へ行く。下駄の磬のように鳴るのが、好い心持である。剥げた木像の据えてある隨身門から内を、古風な瑞籬で囲んである。故郷の家で、お祖母様のお部屋に、錦絵の屏風があった。その絵に、どこの神社であったか知らぬが、こんな瑞垣があったと思う。社殿の縁には、ねんねこ絆纏の中へ赤ん坊を負って、手拭の鉢巻をした小娘が腰を掛けて、寒そうに体を竦めている。純一は拝む気にもなれぬので、小さい門を左の方へ出ると、溝のような池があって、向うの小高い処には常磐木の間に葉の黄ばんだ木の雑った木立がある。濁ってきたない池の水の、所々に泡の浮いているのを見ると、厭に

なつたので、急いで裏門を出た。

藪下の狭い道に這入る。多くは格子戸の嵌まっている小さい家が、一列に並んでいる前に、売物の荷車が止めてあるので、体を横にして通る。右側は崩れ掛って住まわれなくなった古長屋に戸が締めてある。九尺二間というのがこれだと思っていた通り過ぎる。その隣に冠木門のあるのを見ると、色川国士別邸と不恰好な木札に書いて釘附にしている。妙な姓名なので、新聞を読むうちに記憶していた、どこかの議員だったなと思って通る。それから先きは余り綺麗でない別荘らしい家と植木屋のような家とが続いている。左側の丘陵のような処には、大分大きい木が立っているのを、ひどく乱暴に刈り込んでいる。手入の悪い大きい屋敷の裏手だなと思って通り過ぎる。

爪先上がりの道を、平になる処まで登ると、又右側が崖になっていて、上野の山までの間の家の屋根が見える。ふいと左側の籠堀のある家を見ると、毛利某という門札が目につく。純一は、おや、これが鷗村の家だなと思って、一寸立って駒寄の中を覗いて見た。

干からびた老人の癖に、みずみずしい青年の中にはいつてまごついている人、そして愚痴と厭味とを言っている人、竿と紐尺とを持って測地師が土地を測るような小説や脚本を書いている人の事だから、今時分は苦虫を咬み潰したような顔をして起きて出て、台所で炭薪の小言でも言っているだろうと思って、純一は身軀をして門前を立ち去った。

四辻を右へ坂を降りると右も左も菊細工の小屋である。国の芝居の木戸番のように、高い台の上に胡坐をかいた、人買か巾着切りのような男が、どの小屋の前にもいて、手に手に絵番附のよ

うなものを持つてゐるのを、往来の人に押し附けるようにして、うるさく見物を勧める。まだ朝早いので、通る人が少い処へ、純一が通り掛かったのだから、道の両側から純一一人を的にして勧めるのである。外から見えるようにしてある人形を見ようと思つても、純一は足を留めて見ることが出来ない。そこで覚えず足を早めて通り抜けて、右手の広い町へ曲つた。

時計を出して見れば、まだ八時三十分にはならない。まだなかなか大石の目の醒める時刻にはならないので、好い加減な横町を、上野の山の方へ曲つた。狭い町の両側は穢ない長屋で、塩煎餅を焼いている店や、小さい荒物屋がある。物置にしてある小屋の開戸が半分開いてゐるために、身を横にして通らねばならない処さえある。勾配のない溝に、芥が落ちて水が淀んでいる。血色の悪い、瘡せこけた子供がうろろしているのを見ると、いたずらをする元氣もないように思われる。純一は国なんぞにはこんな哀なところはないと思つた。

曲りくねつて行くうちに、小川に掛けた板橋を渡つて、田圃が半分町になり掛かつて、掛流しの折のような新しい家の疎に立っている辺に出た。一軒の家の横側に、ペンキの大字で楽器製造所と書いてある。成程、こんな物のあるのも国と違ふところだと、純一は驚いて見て通つた。

ふいと墓地の横手を谷中の方から降りる、田舎道のような坂の下に出た。灰色の雲のある処から、ない処へ日が廻つて、黄いろい、寂しい暖みのある光がさつと差して来た。坂を上って上野の一部を見ようか、それでは余り遅くなるかも知れないと、危ぶみながら佇立している。

さっきから坂を降りて来るのが、純一が視野のはずれの方に映つていた、書生風の男がじき傍まで来たので、覚えず顔を見合せた。

「小泉じゃあないか」

先方から声を掛けた。

「瀬戸か。出し抜けに逢ったから、僕はびっくりした」

「君より僕の方が余つ程驚かなくちゃあならないのだ。何時出て来たい」

「ゆうべ着いたのだ。やっぱり君は美術学校にいるのかね」

「うむ。今学校から来たのだ。モデルが病氣だと云って出て来ないから、駒込の友達の処へでも行こうと思って出掛けたところだ」

「そんな自由な事が出来るのかね」

「中学とは違うよ」

純一は一本参ったと思った。瀬戸速人とはY市の中学で同級にいたのである。

「どこがどんな処だか、分からないから為方がない」

純一は厭味気なしに折れて出た。瀬戸も実は受持教授が展覧会事務所に往っていないのを幸に、腹が痛いとか何とか云って、ごまかして学校を出て来たのだから、今度は自分の方で気の毒なような心持になった。そして理想主義の看板のような、純一の黒く澄んだ瞳で、自分の顔の表情を見られるのが、頗る不愉快であった。

この時十七八の、不断着で買物にでも行くというような、廂髪の一吋愛敬のある娘が、袖が障るように二人の傍を通って、純一の顔を、気に入った心持を隠さずに現したような見方で見て行った。瀬戸はその娘の肉附の好い体をじっと見て、慌てたように純一の顔に視線を移した。

「君はどこへ行くのだい」

「路花に逢おうと思つて行つたところが、十時でなけりやあ起きないということだから、この辺をさっきからぶらぶらしている」

「大石路花か。なんでもひどく無愛想な奴だということだ。やっぱり君は小説家志願でいるのだね」

「どうなるか知れはしないよ」

「君は財産家だから、なんでも好きな事を遣るが好いさ。紹介でもあるのかい」

「うむ。君が東京へ出てから中学へ来た田中という先生があるのだ。校友会で心易くなつて、僕の処へ遊びに来たのだ。その先生が大石の同窓だもんだから、紹介状を書いて貰つた」

「そんなら好かろう。随分話のしにくい男だというから、ふいと行つたつて駄目だろうと思つたのだ。もうそろそろ十時になるだろう。そこいらまで一しょに行こう」

二人は又狭い横町を抜けて、幅の広い寂しい通を横切つて、純一の一度渡つた、小川に掛けた生木の橋を渡つて、千駄木下の大通に出た。菊見に行くらしい車が、大分続いて藍染橋の方から来る。瀬戸が先へ立つて、ペンキ塗の杣にゐるで井病院と仮名違に書いて立ててある、西側の横町へ這入るので、純一は附いて行く。瀬戸が思い出したように問うた。

「どこにいるのだい」

「まだ日蔭町の宿屋にいる」

「それじゃあ居所が極まつたら知らせてくれ給えよ」

瀬戸は名刺を出して、動坂の下宿の番地を鉛筆で書いて渡した。

「僕はここにいます。君は路花の処へ入門するのかね。盛んな事を遣って盛んな事を書いているというじゃないか」

「君は読まないか」

「小説はめったに読まないよ」

二人は藪下へ出た。瀬戸が立ち留まった。

「僕はここで失敬するが、道は分かるかね」

「ここはさっき通った処だ」

「それじゃあ、いずれその内」

「左様なら」

瀬戸は団子坂^{だんござか}の方へ、純一は根津権現の方へ、ここで袂^{たもと}を分かった。

式

二階の八畳である。東に向いている、西洋風の硝子窓^{ガラス}二つから、形紙を張った向側の壁まで一ぱいに日が差している。この袖浦館という下宿は、支那^{しな}学生なんぞを目当にして建てたものらしい。この部屋は近頃まで印度^{インド}学生が二人住まって、籐^{とう}の長椅子^{ながいす}の上にごろごろしていたのである。その時^{やう}廉^{れん}い羅^ら氈^{せん}の敷いてあった床に、今は畳が敷いてあるが、南の窓の下には記念の長椅子

が置いてある。

テエブルの足を切ったような大机が、東側の二つの窓の間の処に、少し壁から離して無造作に据えてある。何故窓の前に置かないのだと、友達がこの部屋の主人に問うたら、窓掛を引けば日が這入らない、引かなければ目ぶしいと云った。窓掛の白木綿で主人が濡手を拭いたのを、女中が見て亭主に告口をしたことがある。亭主が苦情を言いに来たところが、もう洗濯をしても好い頃だと、あべこべに叱って恐れ入らせたそうだ。この部屋の主人は大石狷太郎である。

大石は今顔を洗って帰って来て、更紗の座布団の上に胡坐をかいて、小さい薬罐の湯氣を立てている火鉢を引き寄せて、敷島を吹かしている。そこへ女中が膳を持って来る。その膳の汁椀の側に、名刺が一枚載せてある。大石はちよいと手に取って名前を読んで、黙って女中の顔を見た。女中はこう云った。

「御飯を上げるのだと申しましたら、それでは待っていると仰しゃって、下にいらっしやいます」

大石は黙って頷いて飯を食い始めた。食いながら座布団の傍にある東京新聞を拡げて、一面の小説を読む。これは自分が書いているのである。社に出ているうちに校正は自分でして置いて、これだけは毎朝一字残さずに読む。それが非常に早い。それからやはり自分の担当している附録にざっと目を通す。附録は文学欄で填めていて、記者は四五人の外に出でない。書くことは、第一流と云われる二三人の作の批評だけであって、その他の事には殆ど全く容喙しないことになっている。大石自身はその二三人の中の一人なのである。飯が済むと、女中は片手に膳、片手に土

瓶びんを持って起たちながら、こう云った。

「お客様をお通し申しましょうか」

「うむ、来ても好い」

返事はしても、女中の方を見もしない。随分そっけなくして、笑談じようだん一つ言わないのに、女中は飽くまで丁寧ていねいにしている。それは大石が外の客の倍も附屈つけくつをするからである。窓掛まどかけ一件の時亭主が閉口へいこうして引込んだのも、同じわけで、大石は下宿料をきちんと払う。時々は面倒だから来月らいげつ分も取って置いてくれいなんぞと云うことさえある。袖浦館そでうらの上から下まで、大石の金力に刃向はむかうものはない。それでいて、着物なんぞは随分質素しつそにしている。今着ている銘撰めいせんの綿入と、締めている白縮緬しろちりめんのへこ帯とは、相応に新しくはあるが、寝る時もこのまま寝て、洋服に着換えない時には、このままどこへでも出掛けるのである。

大石が東京新聞を見てしまつて、傍そばに疊かさねて置いてある、外の新聞二三枚の文学欄しやうがくらんだけを拾読ひろひよみをするところへ、さっきの名刺めいしの客が這入はいりつて来た。二十二三の書生風の男である。縞しまの綿入めんいりに小倉袴こくらばかを穿はいて、羽織はoriは着ていない。名刺には新思潮記者とあつたが、實際この頃の真面目まじめな記者には、こういう風なのが多いのである。

「近藤時雄です」

鋭い目の窪くぼんだ、鼻の尖とがつた顔に、無造作な愛敬あいきやうを湛たたえて、記者は名告なのおつた。

「僕が大石です」

目を挙げて客の顔を見ただけで、新聞は手から置かない。用があるなら、早く言つてしまつて

帰れとでも云いそうな心持が見える。それでも、近藤の顔に初め見えていた微笑は消えない。主人が新聞を手から置くことを予期しないと見える。そしてあらゆる新聞雑誌に肖像の載せてある大石が、自分で名を名告ったのは、全く無用な事であって、その無用な事をしたのは、特に恩恵を施してくれたのだ位に思っているのかも知れない。

「先生。何かお話は願われますまいか」

「何の話ですか」

新聞がやっと手を離れた。

「現代思想というようなお話が伺われると好いのですが」

「別に何も考えてはいません」

「しかし先生のお作に出ている主人公や何ぞの心持ですな。あれをみんなが色々に論じています。が、先生はどう思っているのか分らないのです。そういう事をお話なすって下さると我々青年は為合せなのです。ほんの片端で宜しいのです。手掛りを与えて下されば宜しいのです」

近藤は頻りに迫っている。女中が又名刺を持って来た。紹介状が添えてある。大石は紹介状の田中亮という署名と、小泉純一持参と書いてある処を見た切りで、封を切らずに下に置いて、女中に言った。

「好いからお通なさいと云っておくれ」

近藤は肉薄した。

「どうでしょう、先生、願われますまいか」